

Title	解説
Sub Title	
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.1 (2006. 6) ,p.127- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究動向
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060600-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060600-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 研究動向

解説

坂本 勉

アジア主義は、日本のアカデミズムにおける近現代史研究のなかでどういうわけか長らく避けられてきたテーマである。その原因の一つは、おそらくアジア太平洋戦争期における日本の侵略という事実が研究者の心に重くのしかかり、これを客観的に見る余裕がなかなか生まれにくかったというところにあるといえるかもしれない。この結果、アジア主義を正面から論じる研究は本当に数えるほどしかなく、古くは竹内好の研究、近年では松本健一のそれが挙げられるにすぎない。

本号で掲載したイサム R. ハムザ氏の論考は、こうした日本人に特有な負い目意識に縛られず、外国人の目からみた公平なアジア主義の研究である。明治末期からイスラーム世界の日本に対する関心は、驚くほど高かった。ヨーロッパ列強の政治的、経済的な進出に苦悩するオスマン帝国、エジプト、イランは日露戦争に勝利した日本に帝国主義からの解放の曙光を見だし、日本との連帯を模索する道を探り、そこからパン・イスラーム主義と日本のアジア主義が交差する動きもみられた。

日本における「アジア主義」

ハムザ氏の研究は、以上のような古くからイスラーム世界の人びとの間にある日本への関心の深さの中から生まれてきたものである。幕末期における水戸学派の会沢正志齋から福沢諭吉、中江兆民、樽井藤吉、岡倉天心、北一輝、大川周明に至る「脱亜」の思想と「興亜」、「連合」の思想の整理は短いながらも要を得た近代日本におけるアジア主義の紹介となつている。これを本格的な研究として読むには無理があるが、エジプトの日本学者がアジア主義をどう見ているのか、その関心のありかを知る研究動向としてはまたとないものだと思われる。

ハムザ氏の経歴を簡単に紹介しておくと、一九五六年エジプトに生まれ、カイロ大学文学部日本語日本文学科を卒業した後、同学科の助手として大学に残り、その間に日本に留学、子安宣邦教授の下で一九八二年に大阪大学大学院文学研究科修士課程、さらに一九八七年に同大学院博士課程を修了、エジプト帰国後の一九九一年に大阪大学大学院から横井小楠の思想を論じた「近代日本の新国家構想」で文学博士号を授与された。現在はカイロ大学文学部の準教授を務め、エジプトを代表する日本研究者として活躍している。ここに掲載した論文は、氏自身

一一七 (一一七)

が日本語で執筆したもので、表現や言い回しに若干、不自然なところも見うけられるが、エジプトの日本学者が書いた論考を素直に紹介することに意義があると考へ、あえてあまり多くの手を入れずに掲載することにし

た。これまでほとんど紹介されることのなかったエジプト人のこの学会動向からアジア主義への関心が日本において少しでも高まれば幸いである。

## 日本における「アジア主義」

はじめに

本稿における「アジア主義」は、一九世紀後半の日本近代化過程における「脱亜入欧」論以降、二〇世紀初頭における「大東合邦論」を経て、太平洋戦争期に日本がアジア支配の正当化のために「大東亜共栄圏」というスローガンを掲げるまでの一連の思想傾向をさす。「アジア主義」思想を背景に、欧米勢力を排除して、日本、満州、中国および東南アジア諸民族の共存共栄を説き、日

本をそのアジア圏の盟主としようとした日本の野望は、武力による対外進出をもたらした。第二次世界大戦の終結によってそのような野望は消滅したにもかかわらず、被害を受けた近隣諸国はいまだに、その思想が復活するかのよう日本国内外の動きを警戒している。だからこそ、平和憲法改正論争、自衛隊の正規軍化への動き、歴史教科書問題などのような「アジア主義」思想を暗示する政治的、社会的な動向に対して、内政干渉と思わせる程、敏感な反応をするのである。

イサム R. ハムザ